

☆帝国主義国、植民地従属国、「労働者国家」

三ブロック階級闘争を  
世界プロ独一世界共産主義の勝利へ！  
共産主義者同盟（戦旗派）

# 戦旗

7月5日

5日、20日発行

第351号

編集発行人 鹿島 昇

一部100円

購読料10回1,200円(干共)

戦旗社

品川郵便局私書箱6号  
電話 03(255)6989  
振替 東京176133

## 6・18 摩文仁丘決起を受け

## 7・16〜20 沖縄海洋博爆砕

## 戦犯天皇決死糾弾

## 皇太子上陸阻止に総決起せよ

全国の闘う労働者人民諸君！ いよいよ海洋博爆砕／戦犯天皇決死糾弾／皇太子上陸阻止の荒々しく燃え上る火柱が、沖縄全島を揺がし、「本土」(日本)の天皇主義者、帝国主義者共を恐怖のどん底に突き落とし、日本労働者人民にとっては日本による四百年余りの沖縄差別支配を許してきた腐敗・墮落の歴史と今再び歴史的裏切りをなし沖縄人民を日帝の侵略反革命(戦争)体制に組み込むことを許すのか否かという重大な糾弾の火柱として鋭くつきつけられている。見よ、しつつかと受けとめよ、六・一八摩文仁ヶ丘糾弾の決起を、死してもなお沖縄を占拠している皇軍日本軍の「慰霊碑」に、沖縄人民の怒りは爆発した。

後三〇年たつて今更なんだ。来るなら来てみよ。何が天皇・皇太子の身に及んでも知らないぞ！ という侵略と差別の帰結としての沖縄戦の血の犠牲を強いた「天皇ヒロヒト」を先頭とする日本帝国主義への煮えたざる憎悪と怒りを沖縄全島にみながら、今、「皇太子上陸絶対阻止／海洋博爆砕」の一点に押しあげてきているのだ。「本土」労働者人民諸君！今こそわれわれは、沖縄人民に固く連帯し、まさに海洋博爆砕／皇太子上陸絶対阻止の闘いを命がけて勝利しなければならぬ。わが共産同盟(戦旗派)の総力をかけた「党としての闘い」を貫徹し、「密集せる反革命」の包囲網を断乎として突破し、必らずや、この闘いを勝利させ、七〇年代革命の戦略的総路線の圧倒的物質化の突破口を切り拓くという偉大な任務を遂行するために、「武装せる非合法中央集権党」建設の勝利的展望をも目指して闘い抜く決意を強固に打ち固めている。

## 摩文仁丘決起を受けとめ、皇太子上陸阻止の大爆発へ！！

七・一七〜二〇戦犯天皇の嫡皇子 太子の上陸、海洋博開催を直前にひ

かえ、沖縄人民の決死糾弾、革命的闘いは爆発的高揚へと突き進み、沖縄は七二年植樹祭、七三年若夏国体をはるかにうまわる戦

犯天皇一族糾弾の怒りの島と化している。今春、沖縄女性暴行糾弾、喜瀬武原実弾演習阻止、伊江島山城君狙撃糾弾、海洋博爆砕、皇太子上

陸阻止を掲げた四・二八〜五・一五へと到る全人民的決起、更に六・一八摩文仁丘糾弾、六・二三「日の丸」慰霊祭粉砕闘争の爆発が日本帝国主義のアジア侵略反革命、他民族支配の要としての天皇制・天皇制イデオロギー攻撃の激化という現局面にあつて、きわめて巨大な意義を有している事をますます確認せねばならない。

### 今号の目次

7・16	沖縄現地決戦に総進撃せよ！！	一〜三頁
6・23	闘争灯裂！！(沖縄・関東・九州)	四頁
6・10	「週刊文春」徹底糾弾闘争貫徹！！	八頁
三	里塚公判闘争報告	九頁
東	交反合・反レバ闘争の成果を	十〜十一頁
打	ち固め、日帝打倒へ！！	十二頁
6・23	「日の丸」慰霊祭粉砕闘争爆発！！	十四頁
6・18	摩文仁決起の報告(「赤土」への投稿を転載)	十四頁



6・18 摩文仁糾弾闘争

戦旗

に貫徹し抜くことが問われているのである。

六・一八決起〜二三闘争に示される沖縄人民の闘いの第一の意義は、「島津の琉球侵略、日本の琉球処分、戦前の国内植民地化、戦中の日本軍による虐殺、戦後の犠牲」「天皇の名の下に行われた収奪と虐殺が繰り返された血の歴史」「先祖や祖父の血の叫び」を日帝・大和に対して徹底的にたたきつけ、まさに、皇太子上陸決死糾弾、武装決起を宣言したものに他ならない。

日帝は七二年「返還」の強行を通じ、四百年に及ぶ植民地的差別軍事支配の隠蔽、その歴史的支配の凝縮である天皇制の下での沖縄戦の清算、戦後の米軍の日米帝一体となった差別軍事支配、虐殺の歴史の抹殺をはかり、本年七月十七日皇太子の沖縄上陸をもって、天皇と自衛隊、日本軍による差別軍事支配を沖縄人民に承認させ、一九二二年皇太子(現「天皇」)の沖縄上陸「本土」一体化攻撃、アジア侵略戦争への突入という帝國主義的野望を今再び繰り返さんとしているのだ。

日帝は「戦後は終わった」と強弁し、侵略戦争を美化し、皇太子の摩文仁丘参拝を口実に沖縄戦を聖戦化し、天皇によって虐殺された「戦死者」を「天皇の赤子」としての英霊化、「日の丸」で慰霊し、摩文仁丘の靖国化策動を公然と目論み、沖縄人民の日本(大和)への反革命的統合、同化攻撃を完了し、今再び、沖縄人民をアジア侵略反革命戦争の尖兵へと総動員させんとしている事をはつきりとみとおかねばならない。

第二の意義は天皇の沖縄戦、戦争責任の徹底した回避、清算の諸策動を木端徹塵に粉砕しきり、逆に戦争責任を全人民のものへと明らかにし、日帝の天皇制・天皇制イデオロギー攻撃をもってする沖縄人民の英雄的決起・徹底糾弾・戦闘的エネルギーの圧殺・解体・鎮静化策動を破産させ、逆に、戦犯天皇を階級闘争の真只中に引き込み、政治問題化させ、日帝の政治的意図を全面的に暴露し、天皇を戦争と差別の元凶として浮き上がらせたのである。

更に、第三の意義は沖縄人民の血の歴史、沖縄階級闘争の原体験としてある沖縄戦を見据え、日帝としてあることを自覚し、天皇・「本」の侵略反革命戦争への総動員・革命的統合爆発、皇太子上陸決死阻止を鮮明に刻印し抜き、全沖縄の人々の心を揺り動かし、「本土」の腐敗・墮落をえぐり出し、同時に「沖繩解放」安保粉砕・日帝打倒・米帝放逐、「日・米帝の沖繩差別軍事支配打破」のプロレタリア国際主義で武装した戦略的任務を明確にさせたのである。

第四の意義は、「皇太子上陸決死阻止」日本軍の残虐行為を許さないぞ、大和人は沖繩から出ていけ」というスローガンに示される摩文仁丘糾弾決起の闘いが日帝の侵略戦争糾弾・差別軍事支配・侵略反革命戦争策動粉砕を文字通り結合させ、死せる日本軍(皇軍)の摩文仁丘占拠を許さない徹底糾弾としてあつたことである。

沖繩戦の最高指揮官、牛島満他三二名の軍将兵の碑が丘の頂上にそびえ、「本土」各県の碑が林立し、黎明塔の真下海岸寄りに沖繩人民の慰霊碑の象徴、健児の塔(男子師範学校生徒二八九名と職員十六名)が日本軍碑に見下ろされる様におかれ、姫百合の塔(沖繩第一高女と女子師範生徒一八七名と職員十三名の特志看護隊)、「戦没」医療人の碑(戦傷者の医療に従事し戦死した沖繩人医者、看護婦)は摩文仁丘からかかるかた下った国道沿いにあり、白梅塔(第二高女生徒、職員三九名)は更に離れた真壁部落近くにひっそりとたたずみ、島守塔(沖繩県庁の職員四四六名)、魂魂塔(三万五千柱の無名戦死者)も摩文仁丘裾にたたずんでいる。

将に、沖縄人民の慰霊碑は摩文仁の丘裾にしか位置しておらず、摩文仁丘は虐殺者日本皇軍、牛島満の下に完全に占拠され、まさに天皇が沖縄人民を見下ろしているのである。

「本土」プロレタリア人民は今こそ日帝の沖繩反革命統合を許さざるをえなかつた現実を痛みに自己批判しきり、天皇制・天皇制イデオロギー攻撃の尖兵、皇太子の上陸、摩文仁丘参り込み策動決死

糾弾こそ沖縄人民の血と差別の歴史、苦しみ、怨念、怒りそのものであることを自覚し、天皇・「本」土に虐殺者共への摩文仁丘糾弾を全面的に、断乎として支持し、自らの血債に賭け、決起に連帯し抜きの、帝國主義的「返還」の総仕上げを破綻させる決意を新たに打ち固めねばならない。

第五の意義は、沖解同(準)を先頭とし、わが同盟(戦旗派)を中軸とする沖繩「本土」現地共闘が権力の予防検束的逮捕、起訴攻撃の大弾圧を突破し、着実な活動を繰り上げ、沖繩「本土」の革命的沖繩青年と固く連帯するなから、唯一、天皇・皇太子沖繩の上陸阻止、海洋博粉砕の革命的潮流の画期的前進を獲ちとってきたことである。

まさに、決戦を前にした六月闘

闘うアジア人民と連帯し、日帝打倒の戦略的水路を切りひらけ

六月闘争の切り拓いた、皇太子皇族上陸阻止、海洋博爆砕の文字通り、決戦への煮つくり、成熟という革命的意義を踏まえ、次に、沖繩解放闘争の戦略的意義をインドシナ民族解放闘争の完全勝利という国際的階級闘争の決定的局面のなかで、日帝打倒の戦略的水路、日帝の朝鮮・アジア侵略反革命戦争体制粉砕の決定的要であること争をガッチリと把え返しておこう。

インドシナ人民の民族解放・革命戦争の勝利は全世界プロレタリアート、被抑圧民族人民に戦後世界体制の根底的崩壊の不可避性を告げ、プロレタリア革命が全世界をおおうべき現代過渡期世界の歴史の趨勢を確固不動のものとして刻印した。

ヤルタージュネーブ分割協定・米ソ平和共存体制に示される米帝主義を盟主とする世界反革命支配、戦後世界体制は中国革命の成立、朝鮮・ベトナム革命の前進を克ちとりつつも、帝國主義国のプロレタリア革命の連続的敗北を決定的契機に世界階級闘争を封じ込め、帝國主義の相対的安定期への移行、ソ連共産党をはじめとする

争こそは誰が実践的に闘う沖縄人民と連帯して闘うのか、諸党派・諸政治的潮流の階級的立場を鋭く問い、革命と反革命、日和見主義への実践的境界線を増々鮮明にしつつあり、社共カクマルはもろろんのこと、更には革命的左翼を自称する諸党派のなかから沖繩闘争終焉論への腐敗・墮落、大和排外主義との主体的格闘の放棄、口先だけの猛省、血債を語る最も質の悪い敵対分子を一齐に生み出しているのである。

我々は闘うアジア人民と連帯し、沖繩「本土」の革命的沖繩青年の決起に応え、社共・カクマル排外主義的腐敗、諸派の日和見主義的敵対を粉砕し、七・一七〜二〇皇太子沖繩上陸決死阻止、海洋博爆砕に総決起し、大爆発を獲ちとっていかねばならない。

闘争スケジュール

7月17日羽田現地闘争

朝8時六号橋緑地主催 現地共闘

7月16〜20日沖繩現地闘争

現地共闘

7月23日三里塚東峰十字路公判闘争

一時千葉地裁前

スターリン主義「共産党」の平和革命路線への変質によって一定の存立の可能的根拠をもった。しかし、戦後世界体制はその矛盾の集中を不可避に旧植民地従属国人民に強制せざるをえず、この後進国植民地における階級闘争の反帝民族解放闘争は永続化し、この民族解放・革命戦争の戦略的前進のなかで帝國主義の一切の矛盾を激化させていき、とりわけ、インドシナ、中近東における民族解放・革命戦争によって米帝の侵略反革命戦争政策に破綻を引きおこし、現代帝國主義の唯一の延命の環である国際反革命同盟の再編を強いられ、又、植民地支配体制を維持しえず、決定的に追い込まられ、まさに、解体的危機、総破綻の泥沼におちいつているのである。

インドシナ人民の闘いといった革命的意義は、戦後世界体制の解体、国際反革命同盟の盟主米帝の圧倒的後退・敗北、米ソ平和共存体制・植民地支配体制の解体的危機を一挙に引き出し、又、過渡期世界の歴史的特徴としての国際階級闘争の攻勢的な性格を増々鮮明にさせ、プロレタリア国際主義で武装した三ブロック階級闘争の革命的結合を一貫して生み出し、国際的階級危機を一挙に成熟させ、なによりも、革命の現実的根拠をつくり、勝利の展望をはつきりと打ち固めた点にある。

全世界のプロレタリア被抑圧人民の闘いが高揚し、帝國主義を追いつめればつめる程、帝國主義列強は絶望的延命を計り、より密集した反革命として登場してくる。戦後世界体制・植民地支配体制の崩壊の危機のなかで各国帝國主

義は植民地革命、民族解放、革命戦争、封じ込めのために、国際反革命同盟の再編、強化を露骨に推進し、又、侵略反革命戦争を自らの帝国主義的延命の不可欠の前提とし、戦争体制を一挙に進めんとしている。

インドシナで敗北した米帝は「韓」台「フィリピン」の極東アジアの軍事的防衛、インドネシア・オーストラリア防衛の戦略を確定し、とりわけ、「韓国」における革命の鎮圧、反共の軍事要塞化をその主軸となしている。

アジアにおける革命か反革命かをめぐる内戦的情勢は米帝の巻き返し戦略、日帝の朝鮮侵略反革命戦争の本格的な体制構築のなかで、又、朝鮮人民の革命的決起、朝鮮革命一南北統一の成否のうちに増殖つめあげられているのである。

日・米両帝国主義は朝鮮革命の粉碎に血道をあげ、文字通り、日一米一「韓」反革命臨戦体制が戦後帝国主義世界支配体制防衛の最後の要となっており、かかる革命の前進のなかで、とりわけ日帝は、七〇年安保軍事同盟の再編、七二年沖繩「返還」、反革命的統合を最大のテコとし、五・一五侵略反革命体制を構築し、南朝鮮植民地化攻撃を絶望的に展開させ、朝鮮侵略反革命戦争体制の最終的完成を明確に打ち出している。

我々は日帝が安保、沖繩、朝鮮の三大基軸を通じて、天皇制を頂

### 沖繩人民の決死的闘いに応え 現地武装闘争に総決起せよ

戦後、一貫して帝国主義的反革命世界支配の戦略的要としての位置を強要されてきた沖繩は、帝国主義世界体制の崩壊の危機が進行する中で、反革命巻返し戦略の最大の前進基地として打ち固められんとしている。

核戦略を基軸とした日米安保の強化・再編、日帝の侵略反革命戦争体制への移行それに見合う形で基地機能の強化、沖繩の全社会的再編を徹底した差別軍事支配の貫徹として先行的・集中的に体现している。

海洋博・皇太子沖繩上陸の狙いの一切はそこに集中されているのであり、七二年「返還」以降の反革命的統合の完遂に向けた起爆剤として策謀されているのである。現代過渡期世界に於いて世界革命の問題に代えんとする時、国際反革命同盟として現出した現代過渡期世界に於ける帝国主義的反革命世界支配の構造を集中的に体现した沖繩解放の課題に代えざる事は革命的左翼の試金石なのである。

点とする侵略反革命戦争体制を準備し、朝鮮革命・南北統一の本格的成熟に対抗せんとしていること、そのために、沖繩の海洋博攻撃一反革命的統合を強権的に押し進めていくその野望を、即ち、日帝が天皇制・天皇制イデオロギー攻撃のなかで沖繩人民の反革命的統合を完成させ、朝鮮植民地支配、侵略反革命戦争体制の軍事的拠点として沖繩の差別軍事支配体制を確立せんとしていること、その最大の攻撃として七・一七〜二〇皇太子沖繩上陸・海洋博開催の本質があることを覚えておかねばならない。

我々は日帝の朝鮮侵略反革命戦争体制の要として強行されんとしている戦犯天皇一味・皇太子の沖繩上陸・海洋博攻撃と徹底対決し、抑圧民族としての階級的責任を把握し、まさに、革命的自己批判を「血債」に賭け、連帯していかねばならないのである。

とりわけ、七〇年〜七二年日本階級闘争を担った革命的左翼の多くが国際階級危機の本格的成熟、革命と反革命の激突の急速な煮つまりのなかで、又、日帝の侵略反革命戦争体制の全面的攻撃のなかで完全に革命の戦略的観点を見失わない、沖繩闘争からの逃亡を一斉に開始している現実を痛苦に把握し、何としても、武装進撃に勝利せねばならぬ。

明治以来、日帝の確立・展開の歴史を通して沖繩は差別支配の下、侵略・侵略反革命の橋頭堡としての位置を強要され、今また戦犯天皇の子皇太子を沖繩に上陸させる事を通じて差別同化攻撃を一気に拡大し、朝鮮植民地化攻撃を最大のメルクマルとする日帝の侵略反革命戦争体制確立に向けた前進基地へと沖繩を打ち固めんとする暴挙に出ている。

かかる現実を見るならば、沖繩解放闘争が日帝打倒に向けた最短の水路に位置している事は自明であり、我々が自国帝国主義打倒の立場に於いて七〇年代戦略的反攻の戦取を目指す上で、沖繩階級闘争が希求する基地撤去・差別軍事支配打破の闘いの質に代え日沖階級闘争の反革命的結合を表現してゆく事抜きにその勝利を決して我が物とする事はできない。

沖繩階級闘争の一切が基地問題へと収斂され、しかも、全軍労働者の闘いが端的に示したごとく基地撤去の闘いが、帝国主義の侵略反革命戦争との関連で不断に

自化されてゆくという沖繩人民の沖繩戦の体験を原点にすえた闘いの積極性にかに代えざるかという事は日本一「本土」階級闘争の歴史的使命である。

四百年にもなんんんとする沖繩の差別支配を容認し、皇軍の名に於いて幾万の沖繩人民を殺戮していつた姿こそ日本一「本土」人民の腐敗の究極的姿であり、そして又、沖繩人民の闘いと糾弾に代えようとしなかつた日本階級闘争の腐敗の帰結なのである。七〇年華青闘よりなされた告発・糾弾は安保一沖繩闘争をも含めて革命的左翼が共通に有していた致命的限界なのであり、その事の徹底した切開を抜き七〇年代階級闘争の一步の前進をも獲得する事はできない。

しかも、その事は日向一カクマル主義者のごとく自らの実践的破産を糊塗せんが為のみに、「猛省・血債」を強弁するのではなく、革命的左翼の闘いの実践的到達地平とその継承の中に七〇年安保沖繩闘争が有してきた大和排外主義的限界に対する反省を對象化してこそ革命性を獲得する事が可能なのである。

七二年「返還」を許し、そして又社共による沖繩解放闘争の日本民族主義的歪曲を許してしまつたという革命的左翼の闘いの限界は決して過去のものなどではなく、かかる闘いの敗北の上に日帝は日沖繩の差別軍事支配を強化し、侵略反革命戦争に向けた総動員体制を、沖繩の反革命的統合の完遂をもって実現せんとしているではないか。

海洋博爆砕／皇太子沖繩上陸陸死阻止の闘いをいかなる内実と実践力をもって表現しきるのか、その事こそ実践的基準に於いて革命的左翼の歴史的境界の止場に代えざる道なのである。

七〇年全国反戦の分解を巡って開かれた地平が何であつたのかを再度想起せよ／沖繩解放闘争の国際主義の内実を巡って潮流的分岐が再始されたにもかかわらず、海洋博、皇太子沖繩上陸を前に中核

・解放派をはじめとした一切の党派がこの闘いからの逃亡を開始し、ないしは日向・構改革諸グループは自らの分離主義の本質をあらわに闘いの御題目化をはかる事をもつて破産の口実とせんとしている。日向カクマル主義者は二年間の我が追求の前に経済啓蒙主義へと

自らを純化し、闘争課題の御都合主義的乗り移りのうちに組織的延命のみ窮してきた訳であるが、蜂起一プロ独派の海洋博決戦に向けた怒濤の進撃を前に、構改の威ならぬ威を借りて、沖繩闘争論をひょうり窃し、分離主義を全面化する事をもって共産主義者同盟の最終的清算をなし経済啓蒙主義への道を掃き清めた。

覚悟するがよい、海洋博爆砕／皇太子沖繩上陸陸死阻止の炎は日本帝国主義の野望と共に君たちをも含めて焼き尽くすであろう事を、沖繩階級闘争は「返還」以降三年間の苦汁の中から、今はつきりと巨大な歩みを開始している。五・一五暴動闘争の爆発は日・米帝への永続的闘争性をはつきりと刻印し、復帰協運動の破産の中から基地撤去・差別軍事支配打破の戦略的方向性を模索しつつある。

六・一八摩文仁丘決起は、社共の破産を徹底的に暴き出し、日本帝国主義による差別軍事支配打破の方向性を沖繩階級闘争に刻印した。

今や沖繩階級闘争は戦犯天皇をはつきりと攻撃の射程に入れ、皇太子沖繩上陸陸死阻止の決意に満ち満ちている。

日帝は侵略反革命戦争体制に向けた唯一の精神的支柱とも言うべき天皇を七五年政治過程にかつぎ出した。ボナバ反革命攻撃の一切を天皇制・天皇制イデオロギーに集中しつづ、階級闘争の封じ込めを狙ってきた。七〇年代階級闘争が天皇問題に対する態度を巡ってその分岐が問われてくる中で、皇太子沖繩上陸陸死阻止の闘いは日本階級闘争を内乱期へと押し上げてゆく上での尖端攻防に他ならない。我々は、七月海洋博爆砕、皇太子沖繩上陸陸死阻止の闘いをなにかなんでも実現し、更に九月天皇訪米阻止一連統決起し、日帝の野望を粉々に粉砕し抜く決意である。

皇太子沖繩上陸を座視するならば、天皇制を軸にすえたボナバ反革命攻撃への屈服を宣言するに等しいのである。

蜂起一プロ独派は決戦を前に既に戦闘配備についた。二四時間の反革命との前段攻防に勝利し、沖繩一羽田現地を貫く闘いの爆発を必ずや戦取するであろう。

再度呼びかける。全ての労働者人民は、血債にかけて皇太子沖繩上陸を陸死阻止せよ！

### 「戦旗」変更のお知らせ

352号より 新聞 版に変更します。  
共産主義者同盟(戦旗派)「戦旗」編集局



# 摩文仁丘決起をうけ

# 6.23闘争炸裂！沖縄現地決戦の火蓋切る！！

## 沖縄

### 「戦死者」の英霊化を許さず 戦犯天皇一族上陸徹底糾弾す

六月十八日、戦犯天皇一族、皇太子の沖縄上陸策動に対し、遂に沖縄人民は断乎たる闘いに決起した。死してなお摩文仁丘を占拠する日本軍に対する徹底した糾弾が貫徹されたのである。

「ひめゆりの塔」「健児の塔」を見下し、摩文仁丘を制圧する鹿兒島から北海道に至る日本軍の「慰霊碑」はことごとく、「天皇糾弾」「海洋博粉砕」「皇太子沖縄上陸阻止」「大和人は沖縄から出ていけ」というスローガンで塗りつくされた。

まさにこの沖縄人民による摩文仁丘決起こそは戦犯天皇一族、皇太子沖縄上陸に対する沖縄人民の怒りの爆発としてあり、沖縄戦を聖戦化し、沖縄戦「戦死者」を英霊化し、天皇の戦争責任を清算し、もって沖縄人民を再度侵略反革命の尖兵へと動員せんとする日帝に対する沖縄人民の弾乎とした反撃であった。同時にこの闘いは六月二三日、「本土」から右翼天皇主義者を大挙上陸させて開催されんとする「日の丸」慰霊祭粉砕に向けた先制の痛打でもあったのである。我々は沖縄人民の摩文仁丘決起を断乎支持し、沖縄人民の糾弾を受けとめきり、闘う沖縄人民と固く連帯し戦犯天皇決死糾弾、皇太子沖縄上陸絶対阻止、海洋博決戦勝利に向けて進撃せねばならない。

かかる決意を打ち固め沖縄同（準）、海洋博粉砕沖縄「本土」実行委を中軸とする六・二三実行委は、「日の丸」慰霊祭粉砕、摩文仁丘闘争の勝利に向けた闘いの取り組みを開始した。那覇、糸満を中心とする南部一帯を、「海洋博粉砕」皇太子上陸絶対阻止、沖縄戦の聖戦化を許すな」というスロウター、タテカンでうづめつくし、同時に沖縄戦の最激戦地であった摩文仁周辺の各部落への情宣活動を展開したのである。

真壁 真栄里、国吉等の各部落において農民との討論と交流を実現し、沖縄戦の体験、天皇問題、皇太子の上陸、慰霊祭の問題などにわたって闘いの方向性を更に鮮明化していった。各部落においてはいずれも、日本軍の沖縄戦における虐殺に対する怒り、そして天皇一族に対する怒りの声に満ちあ

ふれており、「皇太子は今頃沖縄に何しに来るのだ」、「皇太子の来沖には絶対反対」、「天皇が沖縄に来たらタックルせよ」といふと沖縄人民は皇太子の来沖策動に対する態度を明らかにしていったのである。

こうした六・二三闘争に向けた実行委の弾乎とした取り組みに対し恐怖した権力は、全く不当にもひめゆりの塔周辺において情宣活動を展開していた同志に対して極めて目的意識的・先行的予防反革命的な弾圧を行ない二名を逮捕していったのである。しかしながら権力がいかに弾圧を行おうとも、天皇に対する、そして皇太子の沖縄上陸に対する沖縄人民の怒りは決して鎮めることはできないのだ。海洋博に対する、そして皇太子の沖縄上陸に対する沖縄人民の怒りの爆発は不可避である。

六月二二日、糸満市中央公民館で討論集会を実現した実行委は、二三日午前九時、糸満市において総決起集会を開催した。総決起集会においては、沖縄解放同盟（準）の基調報告をはじめとし、本部統一現闘団、共産同（全国委）、ポルシェビキ派、労活評、そして最後に海洋博決戦勝利に向けた沖縄反帝戦線の決意表明が弾乎としてなされた。引き続き部隊は、「日の丸」慰霊祭粉砕に向けた強固な決意の下、摩文仁丘へのデモに出発したのである。「本土」から大動員された右翼天皇主義者の敵対を粉砕し、権力の弾圧を打ち砕き、沖縄人民との支持と共感を受ける中、実行委はひめゆりの塔、健児の塔へ、そして摩文仁丘に

## 九州

### 現地決戦勝利へ向け 圧倒的集会を克ち取る

海洋博決戦勝利へ向けて闘い続ける全国の同志、友人諸君、自らの解放へ向けて闘うすべての沖縄人民の皆さん、現闘団への大弾圧と軌を一にしてかけられてきた六名の同志の不当逮捕、うち一名の起訴という敵権力の弾圧をはねかえし我々は六・二三闘争を勝利的

に克ち取った。  
沖縄戦三〇周年の六月二三日、全九州反帝戦線を最先頭に全九州山口各地から結集した七〇余名によって「海洋博決戦勝利・戦犯天皇一味沖縄上陸決死阻止・全九州山口総決起集会」が成功裡に開催された。水上公園で行なわれたこ



6、23 「日の丸」慰霊祭粉碎す

東京における闘いは、海洋博決戦の大爆発に恐れおののく、国家権力一機動隊の靖国神社を中心とした大戒厳令体制を打ち破って闘い

宮沢外相訪米の際の「韓」国条項の再確認を受け、三木は「有事における日米共同作戦」を核持ち込みをも含めて緻密化する必要を公然と明らかにした。そしてその事

先頭を担っている沖解同(準)本部や現闘団を、彼らと連帯し唯一闘い抜く我々蜂起一プロ独派を全力をあげて壊滅させようとしているのである。すべての沖繩人民の皆さん、全国の同志、友人諸君、権力による沖繩での「障害者」収容・抹殺攻撃、五・一四に続く今回の不当逮捕攻撃等々、皇太子の上陸をまえにして日帝はその本性をむき出しにしてきている。一方沖繩人民は五・一五を上回る反日暴動をもつてこれを迎え撃とうとしている。決戦はますます不可避となり、沖繩人民の闘いはますます高揚し続けている。かかる中で「自決権支持」の名の下に決戦から逃亡しようとする部分の反動性ははや明白である。社・共、カクマル社

とられたのである。日本反帝戦線を最先頭に清水谷公園に結集した沖繩一「本土」(日本)現地共闘の決戦勝利の決意と確信に満ち満ちた部隊は密集した統一集会、靖国神社を戦犯天皇決死糾弾/摩文仁ヶ丘の靖国化粉碎のシュプレヒコールで覆い、路行く人の全てが歩を止める圧倒的デモンストレーションを買収したのである。我々は何よりも六月二三日の闘いにおいて、六月二三日という日が沖繩戦終結の日であることを第一に見すえ、沖繩戦が日本軍II皇軍による沖繩人虐殺を最頂点とした大和一日帝による四百年の差別同化攻撃、天皇の名による沖繩人民のアジア侵略への動員、そして戦後の異民族支配一分離支配と、矛盾の最も集中的な表れであったことを何度も、何度も確認しながら闘いを貫徹した。まさしく我々は沖繩の全人口の三分の一二十万人を死に追いやった沖繩戦を日本プロレタリア人民の沖繩人民に対する抑圧者としての集中的表現であったことを徹底して把えかえし、沖繩人民に対する歴史的負債を血償する基点と受けとめるべきことを鮮明に提起しきつたのである。全ての同志、友人諸君、今こそ、海洋博粉砕/皇太子来沖阻止の沖繩人民の決起に実践的な連帯が問われている時はないのである。国際主義の旗をもし防衛しようとするならば、是非とも沖繩一「本土」を買いた七・一七〜二〇海洋博決戦に共に決起せん。

戦体制に突入した。まさしく六・二三闘争は、五・一五那覇暴動闘争、六・一八沖繩人民の摩文仁ヶ丘決起に連帯し、沖繩一「本土」(日本)現地共闘の飛躍的拡大強化をもつて沖繩(摩文仁ヶ丘)九州一首都を買き、海洋博決戦の大爆発を目前にし、それに恐怖する権力のまたしても沖繩における予防反革命弾圧一名の不当逮捕(二二日)をはねのけて闘いとられた。海洋博を目前にし、沖繩現地は闘いの火柱と化している。すべての「本土」労働者階級人民は、五・一九、十一・十、二つのゼネスト、コザ暴動という沖繩人民の差別軍事支配に対する闘いに連帯しきれず沖繩人民に孤立を強いてしまった歴史的事実をはつきりと自己批判し、国際主義の内実を問い、党と革命勢力の飛躍をかけて総力決起しなければならぬ。革命的沖繩人民による過去二度にわたる天皇沖繩上陸実力阻止の地平を一歩たりとも後退させてはならない。沖繩現闘団の農漁民、革命的労働者人民との団結を最先頭に必ずや武装決起しなければならぬ。

女性解放研究会より、六月十日、「週刊文春」に対する徹底糾弾闘争を沖繩女性を最先頭に闘いぬいたという報告が克ちとられ、沖繩一「本土」現地共闘としての取り組みの強化が沖繩連から提起され、圧倒的な拍手で確認されたのである。まさしく「本土」労働者人民の大和排外主義、差別主義への屈服加担を、「買」春観光へのブルジョアマスコミを使つた煽動によって引きだそうとする攻撃を何としても粉碎せねばならない。

### 日向一派の敵対を粉碎し 蜂起一プロ独派の進撃を克ち取る

#### 関東

の集会は、冒頭司会者によつて沖繩現地で二名の同志が不当にも逮捕されたことが明らかにされたのである。全集会参加者はこの権力による暴挙に対して満腔の怒りをこめて糾弾するとともに、これを数倍上回る反撃をもつて絶対に海洋博を粉砕し皇太子に一步たりとも沖繩の土を踏ませない決意をますます強固に打ち固めたのである。こうして集会は、最初の最初から熱気あふれるものとなり、海洋博決戦勝利へ向けた決意はいよいよ強固なものとなつていった。熊本から、長崎から、福岡、北九州から、そして山口から決戦勝利へ向けた決意表明が続々と明らかにされていく。各地の闘いの報告と海洋博粉砕一戦犯天皇一族決死糾弾の決意が述べられるごとに、会場一帯にとどろく拍手と圧倒的な「異議なし」の声で迎えられた。そして長崎からの長崎大産学部海洋博見学阻止闘争勝利の報告はとりわけ大きな拍手と歓声によつて受けとめられていったのである。

その後市内デモに移り、防衛施設局までの闘いを打ち抜いたのである。市内中心街に「海洋博粉砕」「決戦勝利」「沖繩解放」のコールが轟き、沿道の福岡市民は拍手でこれを迎えた。ジグザグデモをまじえ大デモンストレーションをかちとつた我々は、防衛施設局近くの公園で総括集会を行なつていった。発言に立つた全九州反帝戦線の同志は、「マヤグエス号事件、六月十九日以降の米韓共同軍事演習、イエロー・ドラゴン作戦への在沖米軍の出勤に明らかによつて、ベトナム・カンボジアでの決定的敗北以降、帝国主義の植民地支配に占める沖繩の戦略的位置はますます強化されている」こと

をはずきりと明らかにした。そしてそうであるが故に「沖繩解放闘争こそは日本革命の水路を切拓くものとしてあり、革命的左翼の闘いの中に占めてきた沖繩闘争の重大性をはつきりと確認し、沖繩解放一安保粉砕一帝打倒・米帝放逐の総路線の下に闘い抜かなければならない」と我々の任務を鮮明に提起したのである。更に同志は、「皇太子の沖繩上陸をもつて沖繩人民を天皇制イデオロギー、大和排外主義の下に屈服させ日帝の侵略反革命の尖兵にせんとする攻撃に決し、日本人の血償にかけて決戦勝利を必ず克ち取る」とその決意を全人民の前に明らかにしていったのである。

我々の闘いに対して権力はこの日、二〇名を上回る私服警官を動員し顔写真を撮りまくるなど、政治警察の総力をあげて我々に襲いかかってきた。権力はその階級的本能によつて海洋博に対する、皇族の沖繩上陸に対する沖繩人民の怒りが爆発しようとしていることをかきとつている。そしてその最

全国の闘う同志諸君、親愛なる沖繩の同志諸君、労働者人民諸君、六・二三沖繩戦三〇周年、戦犯天皇決死糾弾/天皇・皇太子沖繩上陸絶対阻止/海洋博粉砕の闘いを沖繩解放同盟を最先頭に断乎として克ち取り、我が日本反帝戦線、全国労共闘、高坂共闘一蜂起一プロ独派は文字通り沖繩現地決

闘い抜く我々蜂起一プロ独派を全力をあげて壊滅させようとしているのである。すべての沖繩人民の皆さん、全国の同志、友人諸君、権力による沖繩での「障害者」収容・抹殺攻撃、五・一四に続く今回の不当逮捕攻撃等々、皇太子の上陸をまえにして日帝はその本性をむき出しにしてきている。一方沖繩人民は五・一五を上回る反日暴動をもつてこれを迎え撃とうとしている。決戦はますます不可避となり、沖繩人民の闘いはますます高揚し続けている。かかる中で「自決権支持」の名の下に決戦から逃亡しようとする部分の反動性ははや明白である。社・共、カクマル社

とられたのである。日本反帝戦線を最先頭に清水谷公園に結集した沖繩一「本土」(日本)現地共闘の決戦勝利の決意と確信に満ち満ちた部隊は密集した統一集会、靖国神社を戦犯天皇決死糾弾/摩文仁ヶ丘の靖国化粉碎のシュプレヒコールで覆い、路行く人の全てが歩を止める圧倒的デモンストレーションを買収したのである。我々は何よりも六月二三日の闘いにおいて、六月二三日という日が沖繩戦終結の日であることを第一に見すえ、沖繩戦が日本軍II皇軍による沖繩人虐殺を最頂点とした大和一日帝による四百年の差別同化攻撃、天皇の名による沖繩人民のアジア侵略への動員、そして戦後の異民族支配一分離支配と、矛盾の最も集中的な表れであったことを何度も、何度も確認しながら闘いを貫徹した。まさしく我々は沖繩の全人口の三分の一二十万人を死に追いやった沖繩戦を日本プロレタリア人民の沖繩人民に対する抑圧者としての集中的表現であったことを徹底して把えかえし、沖繩人民に対する歴史的負債を血償する基点と受けとめるべきことを鮮明に提起しきつたのである。全ての同志、友人諸君、今こそ、海洋博粉砕/皇太子来沖阻止の沖繩人民の決起に実践的な連帯が問われている時はないのである。国際主義の旗をもし防衛しようとするならば、是非とも沖繩一「本土」を買いた七・一七〜二〇海洋博決戦に共に決起せん。

女性解放研究会より、六月十日、「週刊文春」に対する徹底糾弾闘争を沖繩女性を最先頭に闘いぬいたという報告が克ちとられ、沖繩一「本土」現地共闘としての取り組みの強化が沖繩連から提起され、圧倒的な拍手で確認されたのである。まさしく「本土」労働者人民の大和排外主義、差別主義への屈服加担を、「買」春観光へのブルジョアマスコミを使つた煽動によって引きだそうとする攻撃を何としても粉碎せねばならない。





# 五・一三裁判11G戦士全員有罪判決 ただちに控訴審へ反撃

全ての労働者、学生諸君！

去る五月二日、東京地裁判事十一部鬼塚裁判長は、五・一三戦士十一G十五名に対し、中村（真）同志、長堀同志に懲役二年六カ月、遠藤（善）同志、近藤同志に同一年六カ月、それぞれ執行猶予三年、等全員有罪という許し難い判決を下した。この判決は最初の一語から最後の一語に至るまで、七二年沖繩「返還」に対して神田武装遊撃戦をもって敢然と応えきつていったわが戦旗派に対する階級的憎悪に貫かれた、徹頭徹尾革命的な暴挙である。

ことにより、現在一番段階の第六Gの被告との分断を画策していることである。執行猶予とは、「三年間おとなしくしていれば刑の執行はしない」という全くもって笑止千万なものであり、予防反革命的弾圧を意図するものでしかないのである。

すなわち、第一に、「機動隊を攻撃する目的で凶器を準備した」というかたちで沖繩問題を完全に抹殺し、「平穩を害し、市民に迷惑をかけた」などと沖繩人民の「返還」に対する怒りと糾弾を無視することにより、「本土」人民の沖繩人民に対する歴史的負債を不問に伏し、「血債の思想」で打ち固められた沖繩人民との連帯の絆を何とか断ち切らんとしていることである。

以上のように、この鬼塚判決は、戦旗派壊滅に血道をあげる警察一検察一裁判所の一体化した姿を赤裸々に暴露したものであり、沖繩の差別支配の尖兵たる鬼塚のかかる差別的居直りをわれわれは断じて許してはならないのである。わが被告団は、この鬼塚判決と全面対決へ向け、すでに五名が控訴審闘争へ断乎として決起している。現在、海洋博が沖繩の革命的統合の最後の仕上げとして目前に迫り、皇太子の訪沖が強行されんとしているなかで、現地沖繩では、反帝戦線現闘団に対する民間右翼の暴行、政治警察によるマン・ツー・マンの尾行、そしてわが革命的同志に対する四・二九、六名（うち一名起訴）、五・一四沖繩五名の不当逮捕、等々といった事態が進行しており、鬼塚判決もかかる海洋博決戦に対する先行的予防反革命弾圧と決して無縁ではないのである。

第二に、「当日の警備は相当だった」として首都戒厳令体制を認め、返還記念式典の舞台裏におけるブルジョア法的にも違法な過剰警備の片棒をかついでいることである。

まさにわれわれは、七二年を頂点とした沖繩「返還」粉砕闘争における五・一三神田武装遊撃戦の輝かしい革命的地平を防衛し、更に沖繩解放へ向けて進撃すべく、五・一三沖繩裁判闘争を海洋博決戦の一翼を担うものとして貫徹しなければならぬのである。

第三に、戦旗派壊滅策動の下に、完黙非転向の革命的戦士に対して肉体的抹殺をも含めた個別撃破を目論んでいることである。このことは、一部の転向組には不起訴処分「恩恵」を与えた検察側の起訴の不平等、及び公訴権の乱用を追求した弁護側主張に対し、「検察側の措置は妥当」等とあいまいにぼかしていることから明らかなのである。

またにわれわれは、七二年を頂点とした沖繩「返還」粉砕闘争における五・一三神田武装遊撃戦の輝かしい革命的地平を防衛し、更に沖繩解放へ向けて進撃すべく、五・一三沖繩裁判闘争を海洋博決戦の一翼を担うものとして貫徹しなければならぬのである。

第四に、検察側のデッチ上げ起訴をも上まわる超反動的デッチ上げを行なっていることである。それは、①明大前のバリエード構築に参加していない被告に対するデッチ上げ、②検察側でさえデッチ上げきれなかったMDグループの被告に対する「火炎ビン一本を投げた」というデッチ上げ、③起訴後に起訴と知らせずに取り調べて作成した違法な供述調書のデッチ上げ、④けが人を手当てしていた被告に対する「投石」のデッチ上げ等々枚挙にいとまがない。

ところで、沖繩解放闘争の荒々しい潮流に抗しきれず、いまや何とかアリバイ工作して延命の道を模索することのみにその全政治生活浪費している日向一派は、この十一G判決の日、被告団の一部に果敢と残党が顔を出し、判決後の被告団会議においてわれわれの海洋博決戦の気迫に圧倒されながら、いつもの日和見の言いつけと泣き事をたれていったのである。すなわち、この鬼塚判決に対しては、「海洋博粉砕闘争に全力を注ぐ為に控訴はしない」と。（海洋博決戦から逃亡する為にだ）彼らにあっては海洋博決戦の沖繩解放闘争における重要性が理解でき

ないが故に、五・一三戦闘の地平を継承し鬼塚判決をハネ返していこうという革命的任務が、何かしら海洋博決戦とは無縁のものとしてしか把え返せないものである。

そもそも日向一派は、昨年第九G判決を突破口としたわれわれの控訴審闘争へ向けた強固な決意の前に、「本当に控訴するわけない」と信じ込むことによって何とかその恐怖をまぎらわそうとしていたのであり、他方では、「実刑にならなくてよかった」と胸をなでおろし、「早く被告団を解散しよう」「被告団財政も解体しよう」などと控訴審闘争への敵対を公然化していたのである。更に本年二月の第二六G判決に際しては被告団会議からさえ逃亡し、（彼らは二六Gからは二年前から全面逃亡していた）われわれの追求に対して、「忙しかった」「他に用事があつた」等と無責任ぶりを露呈する一方、「被告団会議なんかたつた三名しか控訴しなくてシラけたじゃないか」とまったく許せない暴言で居直つたのである。

わが統一被告団は、控訴被告十三名を先頭に日向一派の裏切りと敵対を粉砕し、「戦犯天皇決死糾弾」/「天皇・皇太子沖繩上陸絶対阻止」/「海洋博粉砕」の旗の下、海洋博決戦へ総進撃していくのである。

わが統一被告団は、控訴被告十三名を先頭に日向一派の裏切りと敵対を粉砕し、「戦犯天皇決死糾弾」/「天皇・皇太子沖繩上陸絶対阻止」/「海洋博粉砕」の旗の下、海洋博決戦へ総進撃していくのである。

わが統一被告団は、控訴被告十三名を先頭に日向一派の裏切りと敵対を粉砕し、「戦犯天皇決死糾弾」/「天皇・皇太子沖繩上陸絶対阻止」/「海洋博粉砕」の旗の下、海洋博決戦へ総進撃していくのである。

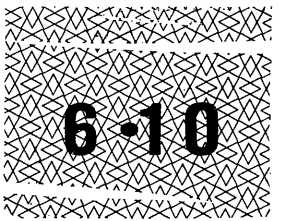
わが統一被告団は、控訴被告十三名を先頭に日向一派の裏切りと敵対を粉砕し、「戦犯天皇決死糾弾」/「天皇・皇太子沖繩上陸絶対阻止」/「海洋博粉砕」の旗の下、海洋博決戦へ総進撃していくのである。

## 日向一派の脱落・敵対を許すな

わが統一被告団は、控訴被告十三名を先頭に日向一派の裏切りと敵対を粉砕し、「戦犯天皇決死糾弾」/「天皇・皇太子沖繩上陸絶対阻止」/「海洋博粉砕」の旗の下、海洋博決戦へ総進撃していくのである。

わが統一被告団は、控訴被告十三名を先頭に日向一派の裏切りと敵対を粉砕し、「戦犯天皇決死糾弾」/「天皇・皇太子沖繩上陸絶対阻止」/「海洋博粉砕」の旗の下、海洋博決戦へ総進撃していくのである。

5・13統一被告団  
(蜂起一プロ独派)



# 「週刊文春」の海洋博「買春」観光 キャンペーン糾弾・追撃戦を貫徹す

全国の同志、労働者、学生のみならず、  
六月十日「週刊文春」徹底糾弾闘争の断乎たる前進を報告する、  
と同時に、七・二〇海洋博開催を前に激発する「買春」観光キャンペーンに対する更なる追撃の闘いに全ての同志の決起を訴える。

## 差別―同化攻撃の 実態「買春」観光

我々は三月から数度に亘る糾弾闘争の中で「週刊文春」の特集記事の差別性を以下のように明らかにしてきた。

- ① 沖縄への歴史的な差別、収奪、「基地」と「買春」をことごとく隠蔽し、「本土」とりわけ男の女性差別、沖縄差別にはつきりと形を与え、「買春」観光に誘っている。その為に差別と偏見を総動員し、事実を歪曲した許しがたい差別記事であること。
- ② 海洋博攻撃下での沖縄人の闘いの決起・糾弾という沖縄の現実を一切ひたかくし、沖縄女性の闘いの圧殺の上で書かれている。
- ③ 「週刊誌ではよくある」男向けの差別記事に止まらないこと。海洋博を控えての大々的な「買春」観光キャンペーンの先頭をきった最も純化された記事であること。



6、10 文春糾弾闘争貫徹す。

さにキャンペーンとしてあることがあきらかになつてゐる。七二年「返還」―海洋博は、日本帝国主義の侵略反革命体制へと沖縄を再編するものとしてあり、その重要な環として沖縄人への差別―同化攻撃が目論まれてゐる。皇太子―天皇沖縄上陸をもつての、差別に満ちた歴史の清算、再度の皇民化の強要、「本土」の一体感の回復などの一方、「買春」観光キャンペーンを軸とした、「めずらしい」「南国的な：：」という差別観光旅行による沖縄差別の助長が、帝国主義の差別支配にとつて不可欠なものとして強行されんとしているのだ。こうした差別―同化攻撃の意図の下に「沖縄振興開発計画」の下で観光地化がはかられてゆきアジアの交流拠点という侵略反革命に沿った歓楽地化がすすめられる。これは「買春」歓楽の島とし、そこを訪れる観光客（「本土」人）へのサービスで生活をたてるという政策に他ならない。同時に「本土」プロレタリア人民の差別主義を助長し、腐敗の泥沼へと更に引きづり込み、沖縄階級闘争との分断を排外主義的に育成せんとするものである。まさにこうした日帝の海洋博攻撃の重要な環として「買春」観光キャンペーンが差別―同化の実態をつくるものとして展開されている。

沖縄は米軍政の下、政策的に「基地」と「買春」が育成され、米兵用にとAサイバーが「公認」され、全市町村の約半分に「買春」

歓楽街がつくられた。接客婦として「買春」を強要される女性は実数一万人以上といわれている。（「返還」前）平均年齢が二十六―三〇才、そして三〇―四〇パーセントが子どもをかかえている。このことは、「基地」を頂点とした戦後の沖縄社会の矛盾―土地と土地とあり、「基地」の占拠、米軍の暴行、産業の圧殺―の集中的なしわよせが女性にかかっていることを示している。同時に彼女達のほとんどが管理「買春」の下で、膨大な前借金と暴力団の監視の中で他に生活を求めることが絶対的に不可能な状態になつてゐる。

「基地」はこの他にも、多くの女性への攻撃をしてきた。日常的な米兵の暴行、あるいは誘拐のみならず、殺人は沖縄女性を恐怖にさらした。六才の幼女を暴行した事件もある。これらは歓楽街、「基地」内を中心に沖縄全島をおおい、女性をひきさき、命までも奪つてきたのだ。

このような「基地」と「買春」の歴史の中で、多くの沖縄女性が基地撤去の闘いに決起し「返還」

## 権力と一体となつた 「文春」を實力糾弾す

こうした歴史の上に現在の進行する海洋博攻撃下での女性への攻撃の現実、「買春」観光キャンペーンの犯罪性を更にはつきりあげている。

十日、徹底糾弾を固く意志統一した革命的な女性を先頭に、実行委に結集したメンバーは四谷駅頭と「文春」本社前において圧倒的な情宣活動を展開した。午後より正門前の糾弾集会をもちと、「週刊文春」への進撃を開始した。

我々の三月よりの糾弾におそれなした「文春」は、正門及び玄関に「故障」の紙切れをはり、ガードマン多数を配置してきた。のみならず私服刑事多数が社内・玄関にもぐりこみ、正門前には、警官のつまつたハコを配置するといふ権力―「文春」一体となつた警戒体制を敷き我々の闘いに当初より敵対してきた。「文春」は「読者の話し合い」という民主的ボーズをかまぐりすて全社をあげて敵対を開始してきた。文字通り権力の庇護の下で「文春」は彼らが

を迎えた。「返還」はすでにその内実を全面的に暴露している。基地はなくなるどころか強化される一方である。米兵による女学生、ホステス暴行事件にはつきりしているように、女性への差別事件は以前より減るということはない。しかし「売春防止法」の適用により、歓楽街は陰然化し、ますます巧妙な管理「買春」が強いられ、その為の暴力団の強化、魔薬の強要、新しい女性のひきいれが進んでいる。

大きく転換したのは「買春」する男が、「本土」観光客が多くなつてゐることである。海洋博工事関係、「本土」資本の社員など「本土」男用に看板がぬりかえられ若い女性の流入が始まつた。

同時に、「本土」男による沖縄女性への暴行・強姦事件が多発し、一人では歩けないという事態がおきてゐる。海洋博工事の「本土」労働者が、女学生を誘拐し、監禁し、体に入墨をして暴力団に売ろうとした事件など、「本土」男の沖縄差別の全面開花であり許しがたい。

弁明するところの「意図はない」といふ言葉とはうらはらに自らが権力の意図―「買春」観光政策の下僕であることを暴露したのである。

わが同志たちはこれらの姑息な敵対を断乎としてはねのけ、實力で正門を突破しガードマンの敵対を粉砕し玄関に突入した。彼らはびつしりと社員・私服で玄関をうずめ我々へ暴力的に敵対し「話しは聞かからぬ人数は少なくしろ」なる糾弾圧殺に出してきた。これらの策動の一切を粉砕し編集長をはじめとした編集局をひきだし糾弾を開始した。彼らはものものしい警戒と同様に一切糾弾を無視圧殺するという意志統一の下、例によつて「そういう意見も参考にすることが撤回と謝罪をするつもりはない」と我々の糾弾に対するとらえかえしを頭から放棄してきた。自らの思想性を真摯にとらえかえすことを極度におそれ、権力―「文春」一体となつた至上命令の下、機械人形と化した彼らは、「見ざる言



わざる聞かざる」をきめこみ、差別者として居おつたのである。にもかかわらずわが革命的な女性戦士の生き方―思想性をかけた糾弾にまったく沈黙してしまふもの、猫なで声でごまかそうとするもの、果てはどろりとしてくるもの、その結果を動揺させ、自らの下僕たる姿を思い知らされていつたのだ、彼らは念仏の様に「撤回はしない」と弱々しく繰り返すばかりである。我々の怒りはとどまるところを知らない。彼らが人間的に根柢を見失い解体されても、なおかつ必死に居直るありさまは、まさに、日帝の沖繩への差別支配―海洋博、「買春」観光にかけた野

## 排外主義と対決する 女性解放へ進撃せよ

望のなりふりかまわぬ貫徹の忠実な犬たる姿なのだ。実行委のメンバーはこれを断じて許さず徹底的に糾弾することを宣言し、玄関前でシュプレヒコール、デモを貫徹した。正門前で情宣を続行したメンバーに対する権力の暴行―いやがらせも、彼らがいかに海洋博を「無事」で成功させることに死活をかけているかの証左である。わが実行委は、当日の闘争でますますあきらかになつた、日帝の「買春」観光攻撃―そしてうち続くキャンペーンを絶対糾弾し抜くあらたな決意をかためたのである。

一定の停滞状態にある。しかも排外主義への道に進みつつある部分が大半を占めている現在、我々の闘いに問われるものは大きい。彼女たちは資本主義社会の下で女性が工場へひきだされ、しかも家庭、職場における差別に苦しめられ、ますます合理化で収奪されてゆくという現実から、婦人労働者の闘いを「女の組合運動」にきりこぎめ、日帝の侵略反革命とそれへの女性の動員という視点をスッカリ欠落させている。例えば職業病に対する闘いや、母体保護の闘いも、そのみとして闘われる時、闘い自体は有意義でありつつも、権利獲得―女権拡大闘争―組合主義に転落し、「女性差別」そのものを解体し、女性解放闘争を解体するという傾向に陥る。こうなると、女性解放を、「社会とちがう婦人部の確立」や「女性差別をしない組合」という目標にきりこぎめ、逆に、糾弾に決起する女性をおしとどめる役わりしか果さない。こうした傾向が大半をおおう現在、プロレタリア団結、国際主義の獲得に向け、差別糾弾闘争を革

# 三里塚 青行隊先頭に第25回 東峰公判闘争貫徹す

「買春」観光は、南朝鮮へのキ―セン観光にみられたように、帝国主義の侵略反革命―植民地化攻撃の遂行の中で、女性の肉体をさしたさせ、それをもつて大きな経済基盤にすえるという構造をつくる。そして帝国主義抑圧民族の観光地としてサービスを強要し、差別と屈服を強いてゆく。一方では同化、そして一方では差別という構造の実態を女性の肉体でなさんとするのだ。常に侵略に伴い女性への暴行があり、「買春」観光が政策的になされる。日帝は朝鮮への侵略反革命の中でキ―セン観光に大量の日本プロレタリアートを送り込み弾圧を突破して決起する南朝鮮人民へ敵対させ、日本国内での入管体制に差別をもつて応えさせるといふ排外主義、差別・分断の実態を差別観光旅行への動員をもつて育成した。

この日、最大動員で決起した日本反帝戦線は、三里塚闘争の永続的武装発展をめざして闘うことを決起せよ。あらゆる「買春」キャンペーン糾弾、天皇・皇太子訪沖絶対阻止の満天下に明らかにし、迫り来る沖繩海洋博決戦に敢然と決起することを訴えた。

この日、最大動員で決起した日本反帝戦線は、三里塚闘争の永続的武装発展をめざして闘うことを決起せよ。あらゆる「買春」キャンペーン糾弾、天皇・皇太子訪沖絶対阻止の満天下に明らかにし、迫り来る沖繩海洋博決戦に敢然と決起することを訴えた。

沖繩への「買春」観光に期待する日帝の意図も、まさにこの点にあり、とりわけ「本土」プロレタリアを差別主義・排外主義に屈服させ、沖繩人民と分断し、沖繩解放闘争への差別敵対へ動員せんとしているのだ。

日本反帝戦線三里塚現闘団より公判闘争の報告を送ります。一九七一年九月第二次代執行実力阻止、就中東峰十字路戦闘に対する事後弾圧、闘争圧殺策動は、一五次に亘る延べ百二〇数名にも及ぶ逮捕に見られるように、組織破壊、活動家破壊を自論を絶対的に許すことの出来ない報復攻撃であった。このことはなによりも検事遠藤が「これは日本におけるベトナム戦争の始まりだ」と言っていることで明白である。

この裁判所―検事一体となつての攻撃に対し青行隊を先頭とする被告団は、第二十一回公判闘争より被告側冒頭陳述を開始した。時あたかも政府―公団の開港策動の相次ぐ破壊という情勢の中で三里塚闘争の永続的武装発展をめざして闘う被告団は、冒頭陳述を通じて三里塚闘争の正当性、歴史的意義を論述し同時に自らの思想性をもつて日帝の侵略反革命の拠点として建設せんとする空港を根底から揺がす全面的な対決として闘い抜かれたのである。

我々は自らの排外主義・差別主義と徹底して訣別する闘いの中からは沖繩人民、そしてアジア人民との連帯は得られないことを知っている。とりわけ沖繩海洋博をメルクマールに東南アジアへの侵略反革命に向けて、天皇の再度の政治への登場を頂点に、差別・分断・排外主義攻撃の嵐がおおひ、多くの部分の屈服が進行している時、我々の国際主義の内実が問われているのだ。

それ故、徹底した差別分断攻撃「殺人罪」デッチあげ策動は、「殺人罪」キャンペーンとして現われ、労働学術の団結を分断せんとしているのだ。徹底した予断と偏見に満ちた検事側の冒陳書とは、かかる意図を更に強化し、「暴虐非道な人殺し集団」なるレッテルをはり、一方

法廷内で最後の冒陳闘争を貫徹する被告団の闘いに呼応し、法廷外で闘い抜かれた集会は、植民地従属国民、沖繩人民の闘いに対して抑圧民族であった歴史的負債を血債にかけて連帯することが鋭く問われ要請された。

## 反帝戦線海洋博 決戦を宣言す

そして又、女性解放戦線における任務もあきらかである。国際婦人年キャンペーンの下、社共は言うにおよばず、多くの婦人運動が「女の能力開発―そのための保護」

この日、最大動員で決起した日本反帝戦線は、三里塚闘争の永続的武装発展をめざして闘うことを決起せよ。あらゆる「買春」キャンペーン糾弾、天皇・皇太子訪沖絶対阻止の満天下に明らかにし、迫り来る沖繩海洋博決戦に敢然と決起することを訴えた。

この日、最大動員で決起した日本反帝戦線は、三里塚闘争の永続的武装発展をめざして闘うことを決起せよ。あらゆる「買春」キャンペーン糾弾、天皇・皇太子訪沖絶対阻止の満天下に明らかにし、迫り来る沖繩海洋博決戦に敢然と決起することを訴えた。

この日参加したほとんどの部分、沖繩海洋博決戦・皇太子訪沖絶対阻止にむけた決意を述べず、逆に七・七連協の諸君などは「沖繩現地にいくことは誤り」である発言に代表される大和排外主義に屈服してしまっているのだ。同志、友人諸君、いよいよ決戦の時が来たのだ。沖繩終焉論者大和排外主義者を踏みしだき、沖繩人民との革命的連帯めざし海洋博粉砕・皇太子訪沖絶対阻止の闘いに突撃していこうではないか、沖繩現地で共に武装決起しよう。

# 東交反合、反レバ闘争の成果を打ち固め

## 日帝の侵略反革命体制構築粉碎へ

全ての労働者、学生、若者の皆さん！  
ベトナム・カンボジア革命の圧倒的勝利と朝鮮人民の血の決起は戦後世界体制―植民地支配体制を根底から揺るがし、帝国主義各国を文字通りの死の淵へと追い込んでいる。今や、絶望的な侵略反革命戦争への突入以外、一切、延命の道をもたない日本帝国主義は沖繩の反革命的統一朝鮮植民地化攻撃の強権的遂行を、天皇制―天皇制イデオロギー攻撃を頂点とする反共民族排外主義への国民的統合をもってなさんとしている。

まさに、労働者階級総体を侵略反革命戦争に排外主義的に動員せんとする日帝の労働者階級への攻撃は、IMF・JCI同盟を反共突撃隊として徹底強化し、「企業防衛―国家防衛」なる帝国主義労働運動派を育成する攻撃にとどまらず、社共―総評・民同、カクマル社会排外主義潮流の反革命的純化を推し進め、「域内平和」づくりの攻撃へと突き進んでいるのだ。「インフレ・経済危機」を煽り、「労働使」共同による国家的危機打破」を提唱する日帝は、総需要抑制攻撃の下、「賃上げ抑制・一五〇ガイド・ライン」攻撃の枠内へと労働者階級の闘いを封じ込め、「域内平和」の下、侵略反革命（戦争）体制構築を野望しているのである。JCI同盟の「節度ある賃闘」「危機打開への労働側の責任」なる「賃金自粛」路線の先行

的提唱をもって開始された今七五春闘は、総評―春闘共闘委の「国民春闘」路線―議会主義路線がますます排外主義の本質、反革命的役割りを拡大させ、三・二七「最賃」ストの裏切り・逃亡、「一五〇ガイド・ライン」攻撃への全面屈服のみならず、スト処分問題においては「慎重に行う」よう権力を哀願するという、反階級的行為を行って腐敗し、日帝の「域内平和」―侵略反革命（戦争）体制構築への「忠誠」を誓う帝国主義社民へと転落する姿を全ての労働者人民の前に公然化させたのである。日本階級闘争―日本労働運動は、今、まさに、かかる日帝の攻撃を支える社共―総評・民同、カクマル、更に帝国主義労働運動派と総対決し、差別・排外主義攻撃を許さず、日帝の侵略反革命を粉碎し、闘うアジア人民と連帯して決起する革命的労働者の潮流こそ要求しているのである。

### 東交反合―反レバ闘争の歴史的到達地平

第一次再建粉砕闘争敗北以降、東交本部（民同）、日共、カクマルの「使」協調路線の下での右傾化を深め、反合闘争の個別課題的展開を行いつつも、総体的には沈滞を余儀なくされた東交労働運動は、七三年秋期、狭山差別裁判闘争―再開公判闘争以降の青年婦人労働者による部落解放闘争への決起をもって決定的転換の契機を作り出していった。東交労働者の狭山闘争への決起は重大な問題を主体に突きつけ、①とりわけ、七四年二月公判闘争における東交内に巣くう一部カクマルによる二・七差別発言に対する糾弾闘争をもって、東交労組―青婦部の組合的団結を切開すべき主体的契

④そして、かかる闘いは、戦闘的経済主義、民同反対派路線の課題一般への運動主義的乗り移り、経済主義・組合主義的歪曲を克服する革命的労働運動構築を、三里塚闘争、沖繩解放闘争、朝鮮連帯闘争、本山闘争への目的意識的決起を通じて克ち取るべき主体的条件の拡大へと発展していったのである。かかる蓄積の上に、機動隊との実力対決の貫徹として闘われた七四年八月都議会闘争は、東交第二次再建合理化粉砕闘争への実践的突破口として位置しながら、その決定的意義ゆえに東交労働者内闘いの継承・発展を巡る激烈な論争―分解を引き起こし、革命的部分と、排外主義的・日和見主義的部分との潮流的分岐が公然化していったのである。

### 民同の屈服と反合闘争の革命的路線

都議会闘争は①日帝―都当局（都議会）による暴力的弾圧と、「革新都政」の反人民性、②都議会―社共による「料金値上げ賛成」のアリバイ的動員による結合を徹底して暴露し、③アリバイ作りに最後尾について来ながらも、暴力的闘争展開に恐怖し、敵対する東交内一部カクマルの日和見主義的排外主義的敵対を粉碎し、④中間諸派（四トロ等）による「青婦部運動の限界」を口実にした日和見主義的集約を糾弾する戦闘的エネルギーを引き出しながら革命的労働者―戦闘的支部大衆による実力闘争の貫徹として断乎として闘い抜かれたのである。

かかる八月都議会闘争の革命的地平は、日帝―交通当局による「叱責―賃金カット」処分と、それと一体化した東交本部（民同）による「組合統制違反に対する自己批判要求」を引き出し、この攻撃に対する態度において、日帝―当局と民同、更に日和見主義的部分の民同追随路線との主体的対決を要求し、革命的潮流の更なる強化、

### 七五春闘―反合決戦を巡り革命的労働者に問われるものは何か

この闘いは、「中央委を監視し、本部のスト貫徹を実現させる」なるカクマル・四トロの腐敗・墮落した民同反対派路線を大きく突破する革命的地平を作り出し、同時に、本部民同による「二・五スト」のアリバイの実現、高島平現地への「組合員の消耗を引き出す」ためのみの動員を引き出す事によって、まさに、東交労働者を牽引し、

戦 旗

七五反合春闘・CTC搬入現地決戦勝利は、九・三〇共闘に結集する革命的労働者による闘い以外ない事を実践的に明らかにしているのだ。

東交民同によるアリの現地動員の集約―当局交渉への歪曲を粉砕し、現地闘争体制の構築へと反合決戦の実践的地平を前進させていった九・三〇共闘を軸とする青年婦人労働者は、東交反合・反レバ闘争の歴史の到達地平の主体化、第二次再建粉砕闘争の戦略的方向性を巡って総括・路線論争を強化してゆき、そこに於いて、①ベトナム・インドシナ民族解放闘争の勝利的前進によって絶望的危機に直面した日帝は朝鮮植民地化―他民族抑圧へと、絶望的攻撃を強化しており、差別排外主義攻撃の強化と、社会排外主義潮流の育成による労働者人民の屈服を図ってきている事、東交第二次再建合理化は、単に労働者への「労働強化・人べらし」攻撃としてあるのではなく、かかる攻撃の一環として把え返されねばならない事、②とりわけ、東交民同・日共、カクマルの反合闘争からの逃亡は「人べらし合理化反対」路線の下に「労働条件」を巡る日帝―当局との「交渉」―和解へと反合闘争を歪曲し、更に、「労働強化反対」を口実に被差別大衆、被抑圧人民の差別糾弾―生活権奪還闘争に排外主義的に敵対し、日帝―当局の差別分断攻撃の尖兵へと転落している現実を教訓化し、反合・反レバ実力闘争の貫徹を被差別大衆、被抑圧民族への連帯を通して、差別・排外主義攻撃との主体的対決へと結合させ、③日帝の労働者人民・被差別大衆・被抑圧民族への攻撃を粉砕する革命的労働運動構築への一大突破口として東交反合・反レバ闘争の革命的方向性を主体化していったのである。

反合・反レバ闘争の地平を打ち固めよ

全国の闘う労働者、学生のみならず、

まさしく、東交反合・反レバ闘争は、日帝の侵略反革命（戦争）体制構築に向けた労働者階級への並々ならぬ決意と、これに屈服する社共―民同、カクマル排外主義潮流の反革命的敵対の姿を公然のものとし、闘う労働者の革命的方針性をますます鮮明なものとした。第二次再建粉砕闘争に決起した東交九・三〇共闘を軸とする革命的労働者は、部落大衆、「障害者」との交流を通して、被差別大衆の差別糾弾闘争に連帯し、労働運動の排外主義的墮落を克服し、日帝の差別排外主義攻撃を粉砕する闘いに決起した。

とりわけ、七四年十・三一「無期懲役」―差別死刑攻撃をもって、無実の部落青年石川一雄氏の「無実・糾弾」の血の叫びを圧殺し、日共の「石川はクロ」―部落は暴力、悪の温床」とする反革命的敵対をひき出し、狭山闘争を闘った主体内部からも、敗北主義、清算主義、融和主義部分を引き出す事を狙い、部落解放闘争の経済主義的歪曲・屈服を強要する日帝の強権的攻撃に対し、狭山闘争の永続的武装的発展を打ち取るべく「実力糾弾・実力奪還」を掲げて闘い抜かれた三・三〇東交実力糾弾闘争への革命的決起は、東交反合決戦を担う青年婦人労働者に主体の再編を要求し、日帝―当局との実力攻防を目前にした四・九東交反合決戦勝利総決起集会を前にして、経済主義・日和見主義分子の脱落・逃亡―敵対を引き出し、反合・反レバ闘争の戦略的牽引を巡る一層鮮明な潮流的分岐を形成していったのである。この時期に於いて交通当局は、「即時現闘退去」―通知を連日行い、「機動隊導入」をちらつかせ、現闘体制の実力排除の姿勢を明らかにし、又、同時に、東交民同は「東交とは無関係であり、いかなる事態にも責任を負わない」との本部決定を下し、更に各支部官僚を使つてのどろろと懐柔策動など、ありとあらゆる手段を駆使した闘争破壊攻撃が全面化し、かかる過程に於いて許しがたい日和見主義的逃亡を図る部分が発生したのである。

その第一の傾向は、「運動的地平を確立し、再度、東交（組合）内のヘゲモニー強化を図る」―「当局の攻撃に対する主体的脆弱性」を語り、「現地闘争体制の解除」を方針化する徹底した脱落・逃亡分子である。彼らは、反合闘争を「課題別共闘」による経済主義的歪曲、民同への完全な屈服を宣言する許しがたい敵対を行うもので

沖繩救援センター（仮称）設置に向けた呼びかけ

進展する国際階級闘争の激化に伴い、今や国家権力の意図は、弾圧手段の飛躍的強化をもつてブルジョア社会とブルジョア国家の防衛を刑法改悪の反革命機能の中におおひ隠すことである。私達は一切のブルジョア総路線の敵対化作業を通じた政治的意図による人民抑圧・弾圧対策を断乎糾弾する。切り捨てられる大衆、プロレタリア人民の悲劇化を断じて許すものではない。

「返還」以降、三年目の沖繩人民の生活は、反人民的「沖繩国際海洋博」の推進に比例して破壊している。「工業立県」化、「観光立県」化に名をかりた沖繩振興開発計画の全ボウは農漁業破壊、CTS建設の具体化に顕著な様に農・漁民切り捨て政策―日本「本土」―最底辺労働者への吸収化であり、この不当弾圧―暴力団介入―御用組合の育成―嘉数学

あり、永遠の民同反対派に他ならない。第二の傾向は、「反合闘争のこれまでの闘いに限定し、部落差別、障害者差別との闘いは具体的には「差別交通行政糾弾」の闘いとして、当局への抗議闘争を行う」と反合・反レバ闘争の実力闘争としての大爆発を否定し、とりわけ「三・三〇共闘のようないは九・三〇共闘の団結を破壊する」と語る事によって、労働者階級の政治闘争への目的意識的決起を圧殺する経済主義・組合主義である。彼らは、東交反合決戦の全人民的拡大、実力闘争の大爆発に恐怖し、「四・九集会への支援招請はナンセンス」なる排外主義ぶりを公然化し、三里塚青年隊の参加に対し「九・三〇共闘は確認していないから参加しないで欲しい」と、三里塚現地での参加を巡る討論を積極的に破壊し、東交反合・反レバ闘争の企業内化を策謀する反階級的行為を行ったのである。「九・三〇共闘は解散し」、「これまでの闘い、討論を青婦部運動の中に持ち込む」なるギマン的主張を弄し、戦闘的組合主義に意味付与する彼等には、東交反合・反レバ闘争の全人民的拡大・実力闘争の大爆発など一切、念頭になく、あるのはただ、企業内経済闘争の戦闘的展開（それも日和見主義的に歪曲された）をもつて青年部内ヘゲモニーを「獲得」したという「戦闘的」経済主義者の墮落した願望のみなのである。

かかる部分には、今日の日帝の労働者階級への攻撃に対する主体的対決など一切、無縁なものでしかなく、三・三〇共闘、四・九集会に主体化された東交反合・反レバ闘争の革命的地平を一切把える事はできないのである。東交反合・反レバ闘争の戦略的方向性とは、民同・日共、カクマル排外主義者共の逃亡、排外主義的敵対を粉砕し、被差別大衆への

連帯を三・三〇東交実力糾弾闘争への決起へと主体化し、四・九集会に於いて突きつけられた、沖繩人民、在日外国人、部落大衆「障害者」、女性からの糾弾を受け、日帝の侵略反革命（戦争）を粉砕する革命的労働者の潮流建設へと突き進むべく東交九・三〇共闘の革命的再編・強化を打ち取る事以外にあり得ないのだ。激化する日帝の侵略反革命攻撃は、海洋博強行―戦犯天皇沖繩上陸へと集中し、天皇制―天皇制イデオロギー攻撃の下、労働者人民を侵略反革命戦争へ動員せんとする決定的な重大局面を迎えている。天皇訪沖を要求し、釣魚台略奪を積極的に承認する社共―民同の排外主義的純化は、今や、闘う労働者人民、被差別大衆、被抑圧民族への許しがたい反革命的敵対へと転化しているのだ。

帝国主義的腐敗・墮落を、「域内平和」への参加をもつて労働者階級に押しつけんとする社共―民同、カクマル社会排外主義と全面対決し、日帝の侵略反革命を粉砕すべく、「海洋博粉砕―皇太子沖繩上陸絶対阻止」の闘いに決起し、歴史的な日本階級闘争―労働運動の排外主義的墮落、帝国主義的腐敗を打ち砕き、血債にかけ沖繩人民、朝鮮人民に連帯する闘いにこそ、決起しなければならぬのだ。

☆一切の排外主義・経済主義・組合主義を粉砕し、東交反合・反レバ闘争の地平を打ち固めよ！  
☆「域内平和」への労働者階級の屈服強要を許さず、日帝の侵略反革命（戦争）体制構築を粉砕せよ！  
☆天皇制―天皇制イデオロギー攻撃を頂点とする日帝の差別・排外主義攻撃を粉砕し、海洋博粉砕／天皇訪沖―訪米絶対阻止に決起せよ！

呼びかけ責任 沖繩舎

沖繩那覇東郵便局私書箱二〇一〇号



6.23

# 「日の丸」慰霊祭粉碎闘争・爆発す!

## 天皇・皇太子沖縄上陸阻止・海洋博粉碎沖縄—「本土」(日本)現地共闘

### 皇太子の沖縄上陸を絶対許すな!!

全ての労働者、農漁民、学生の皆さん!  
皇太子の沖縄上陸、海洋博開催は既に一カ月をきった。皇太子の沖縄上陸を許すのか否か、海洋博の開催を許すのか否か、三週間の闘いの中で、一切の決着をつけねばならない。この緊急にして最大の課題に答え切らねばならない。一切を天皇問題、海洋博問題に集中していかねばならない。  
われわれは、昨年以来の現闘団の闘い、海洋博粉碎沖縄—「本土」実行委本部、「本土」各地での闘いの成果を踏まえ、更にこの闘いを強化すべく、多くの諸団体を結集させ、沖縄同(準)の呼びかけの下に六・二三日の丸慰霊祭粉碎闘争を闘い、六月二四日に実行委の、天皇・皇太子沖縄上陸阻止、海洋博粉碎沖縄—「本土」(日本)現地共闘への発展を克ち取った。更に多くの諸団体、個人がこの現地共闘への結集を呼びかけると共に、天皇問題、海洋博問題をぎりぎり煮つめあげ、共にこの闘いに勝利しぬいていかんことを呼びかける。

### 沖縄戦を忘れるな

われわれは、この間の闘いによって蓄積した海洋博を通じた沖縄の基地支配を基軸とした全社会的再編、朝鮮人強制連行問題、農業・漁業問題、「買」春問題、釣魚台略奪問題、天皇問題を更に一歩発展させるべく、六・二三日の丸慰霊祭粉碎闘争を闘い抜く過程において、沖縄戦と天皇問題をとらえかえすべく、南部の各部落に個別ピラ入れを行い、一軒一軒たずね沖縄戦の体験を聞き、海洋博と皇太子上陸問題、死せる日本軍のマブニヶ丘占拠問題、日帝「朴」による「韓国人」慰霊塔建立問題を討論し、皇太子の上陸を絶対阻止し切れる、海洋博を爆砕し切れるという確信を南部の農民と共に克ちとつた。

将にそのことは実行委本部機関紙「反海洋博ニュース」2で報告した如く、沖縄のヤマトによる一貫した差別支配、天皇の名の下による沖縄戦の最中での日本軍による赤子までも含めた沖縄人虐殺、米軍政支配、そして七二年「返還」とこれらの一切が「煮え」たぎる天皇・皇族に対する怒りとして、マブニヶ丘に対する怒りとして、日本軍に、米軍に、ゴウを追いたてられながら親を殺され、兄弟を殺され、子供を殺され、自分も傷ついた南部住民の中に深く根ざしている事をわれわれが共有し合う作業としてその端初を克ちとつていったものである。  
およそ基地を語る場合、沖縄解放を語る場合、この事を決して忘れてはならない。この歴史を真につかみ切る事なしに天皇を頂点にたてた日本帝国主義の支配体制、アジア侵略、沖縄への差別支配を語る事は出来ないのだ。

日本帝国主義は一方で徹底的な差別支配をおこない、天皇を頂点にたてる事で、沖縄人民に天皇の赤子たる事を、日本人たらんとする事を、強要してきたのである。しかも今また、七二年五・一五「返還」の最後の完成、支配体制確立を目指して日帝侵略の起爆装置たる海洋博開催、皇太子の沖縄上陸を成さんとしているのである。

日・米軍事基地の飛躍的強化を見よ、全軍労働者の大量首切りを見よ、キビ、バイン作の崩壊的事態、漁場を奪われた沖縄漁民、中国漁民を見よ、CTS建設、海洋博を見よ、長谷川労働相の許される差別発言、政策を見よ、「本土」を数倍上回る失業者群を見よ、これらの攻撃の一切が「煮え」た日本帝国主義による沖縄への差別支配であり、安保体制下の支配なのであり、その一大集約環が皇太子の沖縄上陸であり、天皇制・天皇制イデオロギー攻撃である事ははつきりと見抜かなければならない。

### 6・18マブニヶ丘 糾弾闘争断固支持

将にこの闘いの最中、六・一八マブニヶ丘糾弾闘争が打ち抜かれた。虐殺者日本軍が死しても向かつマブニヶ丘を占拠し、沖縄人の慰霊碑たる姫百合の塔、健児の塔、白梅の塔を見下ろすという許しがた現実、しかも毎年六・二三には慰霊祭を逆手にとって天皇主義者共が大挙して「本土」からのりこみ、日本軍沖縄戦死者を英霊化し、マブニヶ丘を靖国化せんとしている事、「平和記念博物館」を反戦の精神で武装する場所としてではなく、むしろ戦争をあおりたて、武器、日の丸を展示し、入口には牛島中将の写真をデカデカと飾りたてているという、将にマブニヶ

帯を戦争精神の「聖域」として打ち固めようとする策動に対して、なによりも戦犯である天皇の皇子である皇太子が天皇の名の下に、天皇制の名の下に海洋博を通してマブニヶにも乗り込まずとする事に對して、将にそれを徹底追求する闘いとしてあつたという事をそこにかかげられたスローガン「皇太子上陸決死阻止、海洋博粉碎、ヤマトンチュー来るな」とともに高く評価し全面的に支持するものである。

これに對して「平和」記念館の最高責任者である屋良「泉」知事を筆頭とした宮里副知事等が、沖縄開発庁長官植木が慰霊祭参加「本土」天皇主義者と結束し、「革新」の名を恥かしめないうで徹底的な中傷「聖域をけがす恥ずべき行為」などとさわぎたてたのである。こんな事が許されるものか、多くの人民の「良くやつた。気持を代弁してくれ」という声をどのようにつまみとりか。「本土」観光客よ、はつきりと知るが良いだろう。皇太子よ、はつきりと知るが良いだろう。

われわれははつきりと宣言する。「マブニヶ丘糾弾断固支持」と。この闘いはかならずや全沖縄人民に波及し皇太子上陸阻止、海洋博粉碎の大爆発として闘い抜かれるであろう。

### 皇太子上陸 阻止を全沖縄へ

十九日には原水協総決起集会在与儀公園でたたかわれ、われわれは断乎とした反海洋博「ニュース」、アダン、六・二三ピラをまき集会に結集していった。

この集会において仲吉理事長より、「何故天皇問題、反海洋博闘争が闘われるのか沖縄戦をとらえかえし、「本土」の代表団も考えてもらいたい。皇太子の上陸反対、海洋博反対」の発言があつた。この発言にははつきりと示される如く六・一八の闘いは、はつきりと全沖縄へと広がり、皇太子の上陸阻止、海洋博粉碎へと爆発していかざるを得ないのである。

我々の闘い、とくに本部現地闘争団の現地農漁民層とがしっかりと結合した海洋博粉碎の闘いは、高教組北部支部の「海洋博反対、皇太子来沖反対」決定にみられる如く名護を中心に北部一帯に拡大している。二・四ゼネストで見られた一部日和見部分による闘いの圧殺を許さず、原水協を中軸に各単

組で次々とあげられる皇太子来沖  
反対の決議を断乎支持し、更に多  
くの決議を要請するとともに、文  
字通り全島セネスト体制でもつて  
皇太子の上陸を絶対阻止しなければ  
ならない。

二二日糸満市内において「沖縄  
戦を考える討論集会」をわれわれ  
は、権力の解散策動にめげず、こ  
れを打ち破り、断乎として克ち取  
った。

### 皇太子を血の

### 海に沈めよ

我々がかかる地平を踏まえ、「日  
の丸慰霊祭を粉砕するんだ」皇太  
子の上陸を阻止するんだ。海洋博  
を爆破するんだ」という決意を  
強固に打ち固め、ポロポロにくず  
れおちた皇太子生誕記念碑のあ  
る糸満三天毛において集会を断固  
として貫徹し、慰霊祭「平和」行  
進にまぎれこんだ天皇主義者共  
糾弾を途中あびせかけ、断固とし  
たデモを三天毛→マブニへと貫徹  
し抜いたのである。姫百合の塔前

## 皇太子来沖・高教組 北部支部も反対決定！

海洋博粉砕沖繩「本土」  
実行委・本部現地闘争団

北部の農漁民、労働者、学生、  
婦人の皆さん、五月三十一日高校教  
職員組合北部支部大会が開かれ、  
その中で海洋博反対と皇太子上陸  
阻止を取りくむことが、圧倒的多  
数で可決され先日の原水協(仲吉  
理事長)の皇太子来沖反対に引き  
つづき、闘いの炎は更に燃え広が  
ろうとしています。私達現闘団も  
大会前に海洋博粉砕、皇太子来沖  
阻止の呼びかけを行ない、ともに  
闘いの決意を新たにしました。

### 燃え上る皇太子

### 来沖阻止の炎

大会では、日本政府の反動的な  
教育支配に対する闘いや、労働者  
の生活を守る闘いなどが決定され、  
その重点目標として、教育・生活  
破壊の元凶であり、道路港湾の整  
備等の関連事業の軍事利用を企む  
海洋博に反対し、海洋博の成功と  
軍国主義をもちこむ皇太子の来沖  
に反対することが決議されたので  
す。

特に学校現場における海洋博の  
影響は、大きな問題となっていま  
す。海洋博関連事業である渡久地  
大橋の開通式には、本部町当局に  
よって鼓笛隊への生徒の参加があ  
しつけられたり、〃いるかのオキ  
ちゃん〃の出迎えに小学生がかり

では、「本土」観光客に糾弾をあ  
びせかけた。しかしわれわれが姫  
百合の塔前で一分間の黙とうを行  
なわんとしたその時、権力がおそ  
いかり黙とうを行なわせないと  
いう暴挙を働いた。ここに権力の  
酷しい姿がはつきりと浮きぼりに  
されたのである。正午には、日本  
軍に、米軍に虐殺された沖縄人に  
対し一分間の黙とうをささげ、マ  
ブニまでのデモを断固として貫徹  
し抜いたのである。

途中沿道では、われわれが個別  
ビラ入れた家々の人が手を振り  
はつきりと連帯していったし、又、  
およそ日の丸が立てられなとい  
うように、天皇・皇太子、日の丸  
慰霊祭に対する闘いがはつきりと  
闘い抜かれたのである。

これでも皇太子は来るのか。来  
るなら来てみるがよい。沖縄人民  
の血の復しゅう！糾弾が待ち受け  
ているだけなのだ。  
皇太子の上陸は必ずや阻止する。  
海洋博は必ず爆破する。全労働者、  
農漁民、学生の皆さん、現地共闘  
と共に闘わん！

だされるところということが行なわれて  
います。  
このような、海洋博の本質をお  
おい隠し、一方的な生徒・職員のお  
かりだしによる教育活動破壊に対  
しても、「海洋博団体見学に反対  
し、諸行事への参加・協力を拒否  
する」と、海洋博反対の闘いを学  
校ぐるみ、地域ぐるみへと広げる  
ことが確認されたのです。

### 闘いを押し 広げよう！！

こうした相次ぐ皇太子来沖阻止  
の決定の前に、「地元には反対は  
ないようだ」とウソぶいていた海  
洋博協会々長大派の企みは、現実  
に一個一個打ち破られていきます。  
そうであるが故に、先日の現闘団  
への不当逮捕にみられるような警  
察を使つての暴力によつて、皇太  
子の上陸を強行しようとしていま  
す。

このように、当然にも正当な海  
洋博反対・皇太子来沖阻止の闘い  
が広がろうとするや、弾圧を強め  
目的をたげようとする日本政府！  
海洋博協会の許さず、学校！地域  
での海洋博反対のとり組みを強め、  
七月十八日皇太子上陸阻止十九  
日海洋博開会式粉砕へと闘いを全  
島へ広げましょう！！

### 北部に赤潮 発生！！

海洋博工事による赤土の流入で、  
北部の漁業は崩壊的な状況でした  
が更に心配されていた赤潮が、五  
※以上の記事は、「あだん」第十五号(一九七五年六月一日)  
を転載したものです。

## 長谷川労相の「本土」 移住」策に抗議する！！

海洋博粉砕沖繩「本土」  
実行委・本部現地闘争団

北部の農漁民、労働者、学生、  
婦人の皆さん、

海洋博によつて上陸した「本土」  
大企業は、沖繩の中小企業を踏み  
倒し、農漁業を破壊してきました  
が、こうした生活破壊や軍労働者  
の大量解雇による失業者の問題に  
対し、日本政府は長谷川労相は、  
四日の国会で「『本土』に移住す  
るしかない」と、問題の根本的な  
解決をウヤムヤにして、犠牲を沖  
繩人民に押しつけようとしていま  
す。

### 沖繩人を追いだす 海洋博を許すな！！

この日本政府の態度は失業問題  
に名をかりて、海洋博と関連事業  
による沖繩人の生活破壊の上に、  
解雇された軍労働者もまきこみ、  
差別の待ちうけている「本土」へ  
追い出し、低い賃金でこき使おう  
というものであり、海洋博による  
沖繩大改造の総仕上げに他なりま  
せん。

その上、戦前の海外移住を「先  
人の気構え」(長谷川労相)と積  
極的にもちだしてきたのは、戦前  
の「ソツク地獄」を生み出した日  
本政府の責任と、その解決策の一  
つとしてあつた「海外移住」が侵  
略戦争へ利用された事実を正当化  
しようとするものです。  
まさに、海洋博のねらいは、沖  
繩人を差別の待ちかまえる「本土」  
へたたくだし、「基地とCTSと  
※以上の記事は、「あだん」第十六号(一九七五年六月八日)  
を転載したものです。

月三〇日頃今泊、浜元等北部一帯  
に広がっていることがわかりまし  
た。このことは、短期間での強行  
な海洋博工事による海の異変であ  
り、自然・漁業破壊を更に進める  
海洋博をなんとしても打ち砕かね  
ばなりません。

私達は、沖繩人民に更なる犠牲  
を強いる日本政府(海洋博協会も  
含む)に対し激しく抗議するとと  
もに、その元凶である海洋博を今  
こそ粉砕しなければなりません。  
過剰警備を打ちくだき  
皇太子来沖阻止闘争を  
強めよう

住民の皆さん、皇太子来沖を  
めぐって闘いの輪が広がっていま  
すが、その中で日本政府は、皇太  
子来沖の際には嚴重な警備体制を  
しき、住民の怒りを暴力的に押え  
こまんとしています。これは「本  
土」から三千人もの機動隊が派遣  
され、皇太子の通る沿道には五、  
六メートルおきに警官を配置する  
というものです。

このような過剰警備体制は、海  
洋博によつて生活を破壊されてい  
る沖繩人民の怒りを圧殺するだけ  
でなく、「赤旗一本もふらせない」  
という方針にみられるごとく、「日  
の丸」は侵略戦争のための天皇思  
想を強要する思想統制さえも行な  
わんとするものであり、絶対に許  
してはならないといえます。  
沖繩戦での沖繩人大虐殺の責任  
を天皇一族の皇太子へも追求する  
とともに、来沖阻止闘争を強めま

### おことわり

天皇・皇太子沖繩上陸阻止・海洋博粉砕沖繩「本土」(日本)現地共闘、及び海洋博粉砕沖繩「本土」  
実行委・本部現地闘争団の原稿は、「戦旗」編集局の  
責任によつて、掲載します。なお、「あだん」には、  
ふり仮名がふつてありましたが、省略しました。

「戦旗」編集局

# 6.18日本軍に対する怒りを込め 摩文仁糾弾闘争を貫徹!!

## —皇太子沖繩上陸決死阻止の火蓋を切る—

波打つ音は、日本軍に虐殺された眠れぬ親兄弟、姉妹の叫びの声である。ホタルが一面で光っている。真暗な道を一步一步突き進んで行く。心臓が鼓動を増す。この地で虐殺されたのだ。赤子までスパイ呼ばわりされて、銃剣で殺されていった事を想起する。道のりは長い。

数分後到着する。日本軍に対する怒りを込めた行動が開始される。赤いペンキは摩文仁を染めた沖繩人の血のようだ。サツマ以来の怨念が大和人の慰霊塔へ爆発する。レイメイの塔、鹿児島島の塔へは、怒りと恨みを込めた腕が鮮やかに走る。着々と行動は展開される。摩文仁は、天皇制、天皇制イデオロギー攻撃に対する闘い、血で血を洗う激烈で壮大な怒りの闘いとして皇太子沖繩上陸決死阻止闘争の火ぶたを切る舞台と化していくだろう。

かつて沖繩戦は、沖繩人を虫ケラの様に虐殺した血の舞台であった。阿鼻叫喚の地獄であった摩文仁ヶ丘は、いま姿を変えようとしている。それは、日本軍の各県別慰霊塔を、戦犯天皇に対する怒りを込めた赤ペンキで塗りつぶす闘いを突破口として闘われているのだ。一秒のムダも許されない。一滴のペンキもムダにはできない。全てが計画通りスムーズに進められて行く。「皇太子沖繩上陸を決死阻止せよ。戦犯天皇ヒロヒト糾弾、沖繩戦の恨みを忘れるな」と胸がつぶやく。腕がふるえる。武者ぶるいだ。スプレーが目にはいる。しかし闘いは進行する。我々沖繩人がガマンにガマンを重ねてきた「大和人」に対する怒りは、この様に展開される。

サツマの沖繩侵略から三百年間沖繩人は、沖繩人としての誇り、独自性を奪われてきた。そして明治政府は、更に徹底した皇民化教育を行ってきた。言葉奪い日本語教育を強制するだけでなく、官僚をサツマを中心に大量に沖繩に送り込み、沖繩人を「大阪」において見せ物にし、沖繩人を沖繩から叩き出し沖繩人の住めない島として造り変えんと

してきた行為は、現在沖繩にかけられている攻撃と寸分の相違もない。しいて言うならば、かつてのサツマが今では全「本土」になった事である。

皇太子沖繩上陸策動は、一部の敵対者、日和見主義者が言う様に海洋博にハクをつける様な単純なものでは決してない。そしてその闘いは、沖繩闘争終焉論者の様なスローガン化した闘いではない。文字通りの決死的闘いであらねばならない。闘う組織、闘う勢力にとつては鮮明なる決断が要求されているのである。「沖繩に行くべきではない」とか「組織温存路線」を主張する諸君にとつては、海洋博闘争、天皇制、天皇制イデオロギー攻撃との対決は、単なるカンパニア的闘いでしかないのだ。我々闘う沖繩青年は、沖繩を喰い物にしてきた連中を充分しり尽くしている。その方法も手口も、沖繩理解者としての仮面のかぶりかたも。だから闘わなければならないのだ。それは、海洋博粉砕潮流の最先頭で闘い抜いている我々沖繩青年の闘いによつて情け容赦なく決着をつけられるであろう。我が切り拓いている死せる日本軍の占拠せる摩文仁ヶ丘に対する闘いは、天皇制、天皇制イデオロギー攻撃に対する一切の敗北主義、輕視主義を粉砕して闘い抜かれるのだ。

日帝に支えられている朴独裁体制は、右翼の笹川良一の援助をうけながら「韓一国人慰霊塔を摩文仁に建設せんと策している。虐殺の張本人たる日本軍慰霊塔と並べて建立せんとしているのだ。沖繩戦で虐殺された朝鮮人の霊を冷たいコンクリートに閉じ込めんとする策略に改めて怒りを感じると共に、朝鮮侵略、アジア侵略へ加担してきた沖繩人民の立場はどうなのかという問いが、波打つ音と共に伝わってくる様だ。

時間はドンドン過ぎていく。我々の親兄弟姉妹は、土の中でつぶやいているであろう。姫百合、健児に眠る先輩は、我々の行動をさぞかし待ちこがれたに違いない。無数の星は、

三〇年間も頭を上げて眠る事ができなかったのだから、我々が行動を展開し始めるとなれば一層輝きを増す様だ。流れ星は、我々に檄を送るかの様に空一ぱいに流れる。

時々車のライトが頭上を照らす。タイヤの音は、日本軍の悲鳴の様だ。死せる日本軍よ、お前らは永久に浮かばれないだろう。たとえコンクリートのビルの立ち並ぶ摩文仁で沖繩人を虐殺してきた返り血を隠そうとも我々沖繩人の恨みは絶対に消えないのだ。沖繩戦の恨みはしつこいのだ。お前らの家族が何べん摩文仁の土を踏み、涙を流そうとも、流された血はより恨みを濃くさせ、お前らと、お前らの家族を苦しめるだろう。

我々はガマンできないのだ。「日の丸」を振り、「最先頭で闘い、国のため、天皇のため」に戦いぬいた：云々」を繰り返す遺族会の天皇主義者の言動を、行動を。日本軍の行動が、一般に伝えられている事と事実が反するからというだけではないのだ。沖繩戦で亡くなった人々の冥福を祈ろうなる觀光団の南部戦跡まわりが、形だけのものであり、沖繩と沖繩人に対する差別抑圧意識の表われであり、夜は、国際通りをウロッキ、女の性を買求める連中、沖繩と沖繩人を珍品主義的にとらえ、何でも買つてやろう、吸い取つてやるうなる大和人の行動に対して、屈辱以外には何も語れな、からだ。戦後世代の我々の闘いは、ただ単に、虐殺された同胞の怒りの代弁者ではない。天皇制を支柱にした日帝の差別抑圧支配の下、自らの解放は、天皇制、天皇制イデオロギー攻撃に屈する事と思ひ込み、忠実なる日本人としてアジア人民を虐殺してきた事が痛苦に胸を刺すからだ。

時間はあと十数分を残すのみとなった。迅速に進めなければならない。人間イザと言うとき意外に落ち着くものである。既成の觀念でしかなかった慰霊塔にたいする神話は完全に打ち砕かれた。「摩文仁ヶ丘は日本軍の慰霊塔だけだ。沖繩人の慰霊塔が建つべきなのに。ないから今まで行つた事がない」と話してくれた老人の言葉が脳裡を廻る。

レイメイの塔、鹿児島島の塔をはじめとして、日本軍の慰霊塔に対する闘いは一応終了した。時間通りに寸分のムダもなく赤いペンキは使われた。帰りがわの波打つ音は、一層響きを増して伝わってくる。ホタルは我々の足下を照して道案内をしているのだろうか。星となつて輝く我々の先輩は、無事帰つてくれと見守っているようだ。

しかし摩文仁に眠る親兄弟、姉妹たちよ、次は戦犯天皇と皇太子の首を叩き切る闘いをプレセントしようと考えている。

(※ 「赤土」三号より転載)

「赤土」(3号)発売中

☆7月15日より書店にて発売します。

天皇・皇太子沖繩上陸阻止

・海洋博粉砕沖繩「本土」

(日本)現地共闘



6.18摩文仁丘糾弾